

韓国漢字音と日本呉音との重層的類似点に就いて

—深摂を中心にして—

金 正彬

(2002年9月30日受理)

On the stratified Resemblance of Chinese readings in Korean and Gō-on readings
·focusing on the Shin-vowel group·

Kim jung vin

The Japanese Gō-on readings in the Shin-vowel group has i,o,a as main vowels, having stratified resemblance with Sino-Korean readings of Chinese characters. This has already its background in the Fan-ts'ie phenomenon of [Jindiansiun] Buddhist Transcriptions of the Liu chaō period, which is probably transferred to Japanese Gō-on readings and sino-Korean readings from synchronic Chinese dialects of the Archaic period till the Liu chaō period.

Key words: Shin-vowel group, Kan-on, Gō-on, stratified Resemblance, Jindian siun, Fan-ts'ie, Archaic period

キーワード：深摂、漢音、呉音、重層的類似点、經典釈文、反切事象、上古音

1. 始めに

深摂は、臻摂と類似した中古音 ə 形をとりながらも、韓国漢字音と日本呉音との反映に於いては一樣ではなく、幾つかの重層性を見せている。嘗て、満田新造博士によって、深摂に於ける韓国漢字音と日本呉音との類似点が挙げられた¹ことがある。しかし、少数の例に限られており、韓国漢字音と日本呉音との類似点のみを中心にしたために、韓国漢字音と日本呉音との重層性については、具体的な言及はなかった。河野六郎博士の「朝鮮漢字音の研究」²の「深摂」にも、例字が取り上げられているだけで具体的な論考は無かった。

本稿では適切な資料を提示し、深摂に於ける韓国漢字音と日本呉音との比較を通して、その重層的類似点を明らかにしたい。そして、六朝期時代の字音事象を反映している陸徳明の『經典釈文』の反切事象を通して、祖系音とどのような関わりを持っているかを探りたい。

研究対象にする日本呉音の資料は「安田八幡宮蔵大般若波羅蜜多經」³（以下、安田本と略称する）であり、その分韻表⁴を参照する。「安田本」には声調も施されているが、本稿では参考に留める。また、「觀智院本類聚名義抄和音分韻表」⁵（以下、「名義抄」と略称する）、「長承本蒙求分韻表」⁶（以下、「蒙求」と略称する）、「佛母大孔雀明王經」⁷（以下、「孔雀經」と略称する）などを参考にした。

1 満田新造「朝鮮字音と日本呉音との類似点について」『中国音韻史論考』1964 武蔵野書院 pp606~624

2 河野六郎『河野六郎著作集2』1979 平凡社

3 東辻保和「安田八幡宮蔵大般若波羅蜜多經に就きて」『訓点語と訓点資料第四十四輯』1971 訓点語学会

4 金 正彬 未発表資料

5 沼本克明『日本漢字音史論輯』築島裕編 1995 汲古書院 pp125~186

6 沼本克明『日本漢字音の歴史的研究』1997 汲古書院 pp277~347

7 李京哲『日韓漢字音体系の比較研究』2001 広島大学教育学研究科学学位論文

2. 非漢音 i 形の層

深撰に於ける日本漢音は、悉く中心母音 i⁸として反映している。「名義抄」、「安田本」にある日本呉音資料には漢音も混ざっているため、判断が容易ではない。また、必ずしも漢音とは言えない非漢音 i 形字音もあるので、具体的な分析を要する。ここで非漢音 i 形と言うのは、安田本に現れる声調的考察によって、漢音声調体系とずれるものも含めている。安田本は院政期以前のものであり、日本呉音の特性上、唐代以後の字音形を反映するとは言い難い。しかし、現段階では呉音ともはっきり言える段階ではないので、さしあたり「非漢音 i 形の層」と称して置く。以下の表は「安田本」にある字音例で、数字は頁、ローマ字は行を表す。

中古音	該字	非漢音 i 形の種	韓国漢字音
侵韻三等開口乙日母平声	任 [•]	ニム 11t,35c,	im
寢韻二等開口乙莊母上声	●枕	シム 44h,	ts'im
初母	●疹	シム 72s,	ts'em
三等 日母	●荏	シム 46e,	n'im
沁韻三等開口乙見母去声	●禁	キム 10l,29n,	kiim
影母	●蔭	イム (オム) 50s,	iim
	●蔭	イム 67i,	iim
日母	●妊	ニム 67q,	n'im

日本呉音の声調は、廣韻平声に呉音上声・去声が、廣韻上声・去声に呉音平声が施されている⁹と言う全体的傾向性がある。こういう先学の研究結果を参照にして分析してみると、侵韻日母の「任[•]」は廣韻平声字であるが、去声字として現れているため、どちらかと言うと非漢音的で、声母 n はこれを立証している。寢韻莊母の「●枕」は廣韻上声字でありながら平声点があるため、非漢音的である。寢韻初母の「●疹」は廣韻上声字でありながら上声・平声の両点が施されていて、この場合の i 形は漢音形・非漢音形とも繋がる。沁韻三等の牙音・喉音の「●禁」「●蔭」「●蔭」は廣韻去声字でありながらも平声点が標されているから、明らかな非漢音形である。また、沁韻日母の「●妊」は廣韻去声字であるが、平声点が、そして声母から見て明らかな非漢音形である。それにも関わらず、漢音形 i として反映しているため、いわゆる非漢音 i 形の層は、中心母音に於いて漢音 i 形の層と歴史的関わりが深いと言える。

3. 非漢音 o 形の層

漢音 i 形の層、非漢音 i 形の層もあることに対して、非漢音 o 形の層も存している。韓国漢字音¹⁰では満田新造博士の「朝鮮字音と日本呉音との類似点に就いて」¹¹の通りに iim 形として現れている。

3-1. 三等開口乙類

中国中古音	該字	日本呉音	漢音	韓国字音
侵韻三乙見母平声	今 [•]	コム 68n,	キン	kiim
影母平声	●瘖	フム 28p,53m,オム 34a,73m,	イン	iim
	●陰	オム 39j, (62d)	イン	iim
寢韻三乙幫母上声	●稟	ホム 10r,14p,44m,65e,69t,71m,73n,79h,	ヒン	p'iim
影母上声	●飲	フム 2o,4o,7b,10t,15m,16i,23a,35e,フレ 12j, (15m,23a)	イン	iim

⁸ 沼本克明博士の「蒙求分韻表」、李京哲博士の「孔雀経分韻表」を参照した。

⁹ 奥村三雄『日本語アクセント史研究』1995 風間書房 pp581~595

¹⁰ 河野六郎『河野六郎著作集 2』「朝鮮漢字音の研究」(1979)にある分韻表を参照した。

¹¹ 満田新造 前掲書 pp606~624

沁韻三乙見母去声	●禁	コム 6h,8e,28o,37i,	キン	kɯm
影母去声	●蔭	ヲム 20o,71r,76n,	イン	ɯm
緝韻三乙影母	邑	ヲフ 41n,75o, オフ 25b,32t,43g,46f, ヲウ 20c,32e, オウ 26b,30b,	イフ	ɯp

* () は無声点のところ、訓点注が無いところは略した。

「今¹²」は廣韻平声字でありながら、去声点が施されている。「●稟」「●飲」は廣韻上声字であるが平声点が、「●禁」「●蔭」は廣韻去声字なのに平声点になっている。明らかに非漢音形の層に属している。しかし、2の非漢音i形の層に対して、これらの仮名注は皆o形を捉えているため、漢音i形・非漢音i形の層とはずれる。

B, Karlgren、河野六郎博士の中古推定音¹²を根拠にして、このo形の非漢音形を日本呉音に属する一つの層と断定付けていいと考えられる。実際、漢和辞典類ではこのo形を呉音として捉えている。即ち、o形の層は日本語学界ですでに認められている日本呉音の一つである。

この深摂に於ける日本呉音o形は、三等開口乙類（侵韻・寢韻・沁韻・緝韻）の全体に亘って現れる。ほとんどが、牙音・喉音を中心にしており、唇音にも「稟ホム」として一例存している。「名義抄」にも、唇音「品ホム」¹³が一例あるから、唇音にも呉音o形の層が現れると言っていいと思われる。「安田本」「名義抄」に、この二字以外の唇音に於ける日本呉音o形は、一切見当たらない。韻鏡¹⁴の寢韻唇音のところには、幫母（稟）・滂母（品）の二字しか現れないことにも原因があろう。

一方、韓国漢字音は満田新造博士の言う通りに、日本呉音o形に類似している字音ɯ形となっている。

3-2. 三等乙開口に於ける韓国漢字音

侵韻三等乙開口見母	金・今・禁・衿・襟	kɯm
溪母	衾・欽・嶽	kɯm
群母	琴・擒・掄・擒・黔	kɯm
疑母	吟・唵・崑	ɯm
曉母	歆・廡	hɯm
影母	音・陰・暗・瘖*	ɯm
寢韻三等乙開口幫母	稟	pɯm
滂母	品	pɯm
見母	錦	kɯm
溪母	唵・噤	kɯm
群母	唵・噤	kɯm
疑母	吟	kɯm
影母	飲	ɯm
沁韻三等乙開口見母	禁・襟	kɯm
群母	衿・衿・噤	kɯm
影母	審・蔭・癡	ɯm
緝韻三等乙開口見母	汲・給・級・急	kɯp
溪母	措・泣*	kɯp (ɯp)
群母	及・笈	kɯp
疑母	戾	ɯp
曉母	吸・噏・翁・滄	hɯp

¹² 河野六郎 前掲書 p475

¹³ 沼本克明 前掲書 1995 汲古書院

¹⁴ 藤堂和保・馬淵和夫博士の韻鏡校本を参照した。

影母	邑・浥・悒・飽	ɯp
羽母	煜・熠	ɯp

このように、韓国漢字音 ɯ 形は、日本呉音 o 形と対応し、また、その出所も唇音・牙音・喉音として、類似点を見せている。唇音の「稟 pɯm」「品 pɯm」は現在、「pum」となっており、これは韓国語音に於ける母音の調音点後退現象のためで、この現象が、唇音に限られている理由は、唇に依る調音法のためであろう。このやや弱い口蓋音 ɯ が牙音、喉音では、調音点がお互いに近いため、保たれやすく、現在も ɯ 形を捉えている。

*表のところの「泣」は、声母にずれがあるが、中心母音 ɯ となっており、例外ではない。しかし、「瘡 am」の場合には中心母音 a となっており、日本呉音 o 形とはずれず。詳しくは後述する。

4. 非漢音 a 形の層に就いて

深摂には上記の非漢音 i 形、呉音 o 形以外にもう一つの層がある。

沁韻二等疏母去声	●滲	サウ 72m,	シン	sem
----------	----	---------	----	-----

「滲」は、廣韻去声字でありながら、平声点が施され、明らかに非漢音 a 形を捉えている。日本側の漢和辞典類には、載っていない字音形で、また、語例も全くないので、注目すべきところである。この非漢音 a 形は「名義抄」の正齒二等初母字にも、一例現れている。

沁韻二等初母上声	磳	サム	シン	ts'em
----------	---	----	----	-------

安田本には「磳シム 72s」として非漢音 i 形を捉えている。他の正齒二等字及び、齒音全体の日本呉音は、中心母音 i として漢音形になっているため、この a 形は齒音の全体には及んでいない。つまり、三等開口乙類では、唇音・牙音・喉音を中心に、o 形の呉音的特性が現れており、正齒二等の「滲」「磳」は a 形として、漢音 i 形、非漢音 i 形、呉音 o 形とは、明らかに異質的な字音形となる。他の舌音・齒音・半舌音・半齒音には漢音、呉音に関わらず、原則的に i¹⁵として現れる。日本側の辞典類では、この正齒二等に現れる「滲」「磳」に対する明確な記述が無く、「滲」「磳」に対して呉音・漢音ともに「シン」¹⁶として取り扱っている。ただ、大漢和辞典に「磳サフ」もあるが、合韻字であるから沁韻の「滲」、寢韻の「磳」からは論外になる。

さて、この異質的な呉音 a 形の問題は韓国漢字音にまで繋がる。

侵韻三等乙開口影母	瘡	am
莊母	簪・播・蓼	tsem
初母	蓼・參	ts'em
牀母	涇・岑・枿*	tsem
疏母	參・蓼・滲・森	sem
寢韻三等乙開口初母	塤・磳	ts'em
疏母	瘳*	sim
沁韻三等乙開口莊母	譜	tsem
初母	識	ts'em
疏母	滲・罨	sem

¹⁵ 沼本克明博士の「長承本蒙求」、李京哲博士の「佛母大孔雀明王經」分韻表を参照したが該字がないものは、漢和辞典類を参照した。

¹⁶ 諸橋轍次の『大漢和辞典』を参照した。藤堂保和の『学研漢和辞典』には「滲」字がない。

このように、侵韻牀母の「𪛗*tsin」、寢韻疏母の「𪛗*sim」を除いてすべて e 形¹⁷として現われ、現在は a 形になっている。これは正齒二等の特徴で、三等甲類では全て i 形を捉えていることと比べて、明らかに異質的な字音層である。日本呉音の正齒二等「𪛗サム」「𪛗サウ」は、正に此れと性質を同じくするものであると考えられる。

侵韻・寢韻・沁韻などは、上古の侵部・緝部に属し、侵部・緝部は葉部・談部と関わりがある。従って、両者の間に混用があり、段玉裁は侵部・緝部の監・葉韻字を談部・葉部に入れている。また、詩韻と諧声に於いて談部との通用があり、更に、詩経の談部「三」字には、侵部の「森」で訓注が施されている¹⁸ものがある。これによって、上古の侵部には、談韻にあるような字音形の類似も想定できる。即ち、侵韻に現れる日本呉音 a 形は、B.Karlgren、董同龢などによる談部の上古推定音 $\tilde{a} > e$ 、侵部の上古推定音 $\tilde{a} > e$ と関わりのある、明らかな古音となるはずである。

臻摂・深摂三等乙類に於ける韓国漢字音にも「e」母音が存し、過去、ある時期に「a」を表したが、韓国語音の母音変化と言う内部事情によって、「e」は「a」を表せなくなり、新しい母音「ㅓ」を立てた¹⁹とすれば、明らかに非漢音 a 形は日本の古呉音に属することになる。

この場合、韓国漢字音に於いては、 $\tilde{a} > e > \Lambda > \text{ㅓ}$ のような字音形の系譜が想定され、満田新造博士の「朝鮮字音と日本呉音との類似点に就いて」、大野晋博士の「オ列乙類との関わり」²⁰、即ち、母音調和の観点からの女性母音、中舌母音或いは前舌円唇母音などを根拠にして見ると、非漢音 o 形の源流は韓国漢字音の ㅓ 形に対応すると言うことに就いては間違いないと考えられる。従って、非漢音 a 形は、過去、或る時期に o 形以前の字音形を表したものになる。

5. 祖系音との関わりに就いて

「安田本」の日本呉音には、i, o, a とする三つの層が存していることが明らかになったと思われる。さて、このような字音事象は、祖系音とどのような関わりを持っているのかを調べて見たい。これには、坂井健一氏の『魏晋南北朝字音研究』が好資料になり、本項ではこれに基づいて陸徳明の『經典釈文』に現れる反切事象を分析する。「」は該字で、/ の左は反切上字、右は反切下字を示す。一例のみは同音字注で、反切下字の上声、去声、入声字は平声字で代表する。

5-1. 除邈音義資料

侵韻乙溪母平声「𪛗」	欽 (侵韻乙溪母平声)
影母平声「愔」	於 (魚韻乙影母平声) / 林 (侵韻乙来母平声)
精母平声「緝」	侵 (侵韻甲精母平声)
	息 (蒸韻甲心母平声) / 廉 (監韻乙来母平声)
莊母平声「簪」	側 (蒸韻乙莊母入声) / 林 (侵韻乙来母平声)
	作 (唐韻精母入声) / 南 (覃韻泥母平声)
疏母平声「參」	所 (魚韻乙疏母上声) / 林 (侵韻乙来母平声)
禪母平声「𪛗」	市 (之韻乙禪母上声) / 林 (侵韻乙来母平声)
寢韻乙審母上声「𪛗」	舒 (魚韻乙審母平声) / 冉 (監韻乙来母上声)
曉母平声「𪛗」	火 (戈韻曉母平声) / 飲 (侵韻乙影母上声)
日母上声「𪛗」	而 (之韻乙日母平声) / 鳩 (侵韻乙定母去声)
沁韻乙定母去声「𪛗」	子 (之韻甲精母上声) / 廉 (監韻乙来母平声)
来母去声「臨」	力 (蒸韻乙来母入声) / 鳩 (侵韻乙定母去声)
日母去声「𪛗」	而 (之韻乙日母平声) / 鳩 (侵韻乙定母去声)
緝韻乙定母入声「𪛗」	於 (魚韻乙影母平声) / 執 (侵韻乙照母入声)

¹⁷ 河野六郎「朝鮮漢字音の研究」の資料分韻表を参照した。

¹⁸ 董同龢『上古音韻表稿』1945 台聯国風出版社 p114

¹⁹ 河野六郎 前掲書 1979 p470

²⁰ 大野晋『上代仮名遣い』1953 岩波書店 p167

- 見母入声「給」 其（之韻乙群母平声）／劫（嚴韻乙見母入声）
渠（魚韻乙群母平声）／急（侵韻乙見母入声）
- 邪母入声「褶」 徒（模韻定母平声）／變（添韻心母入声）
- 5-2. 郭璞音義資料
- 侵韻乙曉母平声「廠」 欽（侵韻乙溪母平声）
欽（侵韻乙曉母平声）
- 喻母平声「蟬」 淫（侵韻乙喻母平声）
- 透母平声「緜」 勑（哈韻心母去声）／淫（侵韻乙喻母平声）
「琛」 舒（魚韻乙審母平声）／金（侵韻乙見母平声）
- 甲邪母平声「鬻」 財（哈韻從母平声）／金（侵韻乙見母平声）
- 乙牀母平声「涔」 潛（鹽韻從母平声）
岑（侵韻乙牀母平声）
- 寢韻乙疏母平声「慘」 霜（陽韻乙疏母平声）／甚（侵韻乙禪母上声）
疏（魚韻乙疏母平声）／蔭（侵韻乙影母去声）
- 緝韻乙群母入声「鷁」 巨（魚韻乙群母去声）／立（侵韻乙來母入声）
- 定母入声「蟄」 執（侵韻乙照母入声）
- 影母入声「揖」 一（真韻甲影母入声）／入（侵韻乙日母入声）
- 曉母入声「欵」 疏（魚韻乙疏母平声）／獵（鹽韻乙來母入声）
- 5-3. 韋昭音義資料
- 侵韻乙來母平声「琳」 來（哈韻來母平声）／金（侵韻乙見母平声）
- 沁韻甲清母去声「沁」 思（之韻甲心母平声）／金（侵韻乙見母平声）
- 5-4. 字林音義資料
- 侵韻乙曉母平声「廠」 火（戈韻曉母平声）／欽（侵韻乙溪母平声）
- 初母平声「駸」 七（真韻甲清母入声）／林（侵韻乙來母平声）
- 牀母平声「岑」 才（哈韻從母平声）／心（侵韻甲心母平声）
- 寢韻乙初母平声「稜」 寢（侵韻甲清母上声）
- 審母上声「暉」 式（蒸韻乙審母入声）／枉（侵韻乙日母去声）
- 5-5. 呂忱音義資料
- 緝韻乙群母入声「鷁」 巨（魚韻乙群母去声）／立（侵韻乙來母入声）
- 5-6. 沈重音義資料
- 侵韻乙精母平声「緜」 侵（侵韻甲精母平声）
倉（唐韻清母平声）／林（侵韻乙來母平声）
- 曉母入声「貽」 於（魚韻乙影母平声）／闔（談韻匣母入声）
- 5-7. 戚衰音義資料
- 侵韻甲喻母平声「鐔」 淫（侵韻甲喻母平声）
- 5-8. 沈旋音義資料
- 寢韻乙定母上声「簞」 徒（模韻定母平声）／感（覃韻見母上声）
- 5-9. 謝嶠音義資料
- 寢韻乙疏母平声「慘」 胥（魚韻甲心母平声）／寢（侵韻甲清母上声）
- 5-10. 顧野王音義資料
- 侵韻乙見母平声「衿」 渠（魚韻乙群母平声）／鳩（侵韻乙定母去声）
- 緝韻乙曉母入声「欵」 許（魚韻乙曉母上声）／葉（鹽韻甲喻母入声）
- 5-11. 孫炎音義資料
- 5-12. 鄭玄音義資料
- 侵韻乙影母去声「陰」 蔭（侵韻乙影母去声）
日母平声「任」 而（之韻乙日母平声）／鳩（侵韻乙定母去声）

沁韻乙影母上声「飲」 於（魚韻乙影母平声）／鳩（侵韻乙定母去声）

5・13. 施乾音義資料

沁韻乙日母去声「篤」 没？／沁（沁韻甲精母去声）

緝韻乙群母入声「鷓」 及（侵韻乙群母入声）

上記のように反切下字として、殆ど、上古の侵部、緝部字を使っているが、これらは日本呉音で*i*、*o*音形で現れる。例えば、「悒」（侵韻乙影母平声）、「綾」（侵韻乙精母平声）、「簪」（侵韻乙莊母平声）、「參」（侵韻乙疏母平声）、「諶」（侵韻乙禪母平声）などの反切下字で使われた「林」（侵韻乙来母平声）は、『類聚名義抄』にあるような*i*音形が想定される。また、「飪」（寢韻乙日母上声）、「臨」（沁韻乙来母去声）、「紆」（沁韻乙日母去声）などの反切下字で使われた「鳩」（侵韻乙定母去声）も同様な*i*音形であろう。

これらの*i*音形以外に、「廠」（寢韻乙曉母平声）の反切下字「飲」（侵韻乙影母上声）、「陰」（侵韻乙影母去声）の同音字注「蔭」（侵韻乙影母去声）などは、「薬師寺藏大般若経音義甲本」に「ヲン」、「安田本」に「陰 オム 39j,62d」「飲 ヲム 2o,4,7b,10t,15m,16i,23a,35e」、「蔭 ヲム 20o,50s,71r,76n」、『類聚名義抄』に「オム」とあるように、何れも*o*音形であろう。

なお、「韋昭音義」にある「琳」（侵韻乙来母平声）、「沁」（沁韻甲清母去声）の反切下字「金」（侵韻乙見母平声）は、「薬師寺藏大般若経音義」に「コム」とあるように日本呉音では*o*音形になるはずであろうが、反切帛字上では、*o*音形にならない。

更に、侵部、緝部に該当する『經典积文』の反切には、談部、葉部字が見られる。例えば、「除邈音義」の「簪」（侵韻乙莊母平声）は、覃韻字「南」、「沈旋音義」の「簪」（寢韻乙定母上声）も覃韻字「感」を反切下字としている。また、「沈重音義」の「胎」（侵韻乙曉母入声）は、談韻字「闔」を反切下字で使っている。これ以外にも、「除邈音義」の「綾」（侵韻乙精母平声）、「滄」（寢韻乙審母上声）、「湛」（沁韻乙定母去声）、「郭璞音義」の「歛」（緝韻乙曉母入声）は、監韻字「廉」を反切下字に、「顧野王音義」の「歛」（緝韻乙曉母入声）も監韻字「葉」を反切下字で使っており、「除邈音義」の「給」（緝韻乙見母入声）は、嚴韻字「劫」を、「摺」（侵韻乙邪母入声）は、添韻字「燮」を反切下字で使っている。「郭璞音義」の「涪」（侵韻乙牀母平声）は、監韻の「潛」を同音字注としている。このような、談部、葉部字は、*a*音形が主音を成しており、「安田本」の「・滲」（サウ 72m,）『類聚名義抄』の「磻」（サム）に現れる*a*音形は、このような歴史的背景によるものであろう。この両者に於ける中世韓国漢字音は、sem、ts'emとして、現在は皆、*a*音形になっている。

6. 結論

一般的に牙音・喉音の音韻変化は舌音類、齒音類に比べて遅れる²¹ことがあり、これに対する舌音類、齒音類の音韻変化は、相対的に早い時期から進行したと言える。これは、言うまでも無く介母音の干渉によることで、特に舌音三等、正齒二等・三等、半齒音に於ける音韻変化が著しかったと想像できる。「安田本」には舌音の例字がないが、『類聚名義抄』『法華経音義』などには舌頭音と舌上音との混入²²が認められる。これを根拠にすると、中国語音史に於ける拗介音の発生は、すでに六朝時代のある時期から現れていたことになる。韓国漢字音の日母に於けるゼロ声母の発生も、この拗介音と関係が深い²³。つまり、舌音類、齒音類に於ける非漢音*i*形の層は、早いうちに形成され、後代のある時期になっては、牙音・喉音に於ける呉音*o*形の層と同時共存するようになったのであろう。

日本呉音*o*形は、牙音、喉音以外に唇音（稟・品の二字）にも現れている。しかし、これ以外の舌音類・齒音類での呉音字は、*o*音形とならず、「名義抄」「安田本」の呉音資料にもあるような*i*音形をとっていることで、調音点による歴史的差異は分明である。この調音点による歴史的音韻変化の遅速において、呉音*o*

²¹ 大野晋 前掲書 p186

²² 錢大昕、B.Karlgren、陳新雄、王力などは南北朝に入り、介母音*j*のために舌上音が生じたと主張し、日本呉音にも鮮明な区別を成していない。詳しくは、筆者の「日韓漢字音に於ける舌音に就いての通時的対照研究」（『日本語文学 16 輯』2001, 11.日本語文学会 p83）に譲る。

²³ 金正彬「韓日漢字音のゼロ声母に就いての対照研究」（『日本語文学 14 輯』2001 日本語文学会）

層は、非漢音 i 層より、より古い字音類であることは動き難いことであろう。

さらに、非漢音 a 層は、上古時代の詩経に於ける談部と侵部との通用、5にあるような六朝期時代『經典積文』の反切事象にその背景が確認できる。

このように、日本呉音にはいくつかの重(複)層性を見せており、本稿ではすくなくとも非漢音 i 形の層、呉音 o 形の層、古呉音 a 形の層という三種が確認されたわけである。また、この日本呉音的特質は、韓国漢字音にも明確に現れ、重層的類似点を見せているわけである。こういう重(複)層性は、六朝期『經典積文』の反切に既に現れている事象で、日本呉音と韓国漢字音は、中国側の六朝期字音事象²⁴の影響を強く受けたことが確かめられる。

なお、日本側の漢和辞典類に、沁韻字「滲」「磳」に対して演繹の方法により、漢音、呉音ともに i 音形としているが、日本呉音として一等資料に属する「安田本」『類聚名義抄』には、明らかに a 音形として現れているため、修正すべきであろう。

参考文献

- 大野 晋『上代仮名遣い』1953 岩波書店 p167
奥村三雄『日本語アクセント史研究』1995 風間書房
河野六郎『河野六郎著作集2』「朝鮮漢字音の研究」凡人社 1979
築島裕 『大般若経音義の研究』1977 勉誠社
董同龢 『上古音韻表稿』1945 台聯国風出版社 p114
沼本克明『日本漢字音史論輯』築島裕編 1995 汲古書院
沼本克明『日本漢字音の歴史的研究』1997 汲古書院
馬淵和夫『韻鏡校本と廣韻索引』1970 巖南堂書店
満田新造『中国音韻史論考』1964 武蔵野書院
李 京哲『日韓漢字音体系の比較研究』2001 広島大学教育学研究科学学位論文
金 正彬『日本語文学 14 輯, 16 輯』2001 日本語文学会

(指導教官: 沼本克明)

²⁴ 沼本克明「侯韻字の仮名書き音形を通して探る呉音の祖系音」『国語国文 52-1』1983 中央図書出版社 p32